



ぶっちゃけインタビュアー  
新雅史 さへし たかあき  
社会学者

災害が  
教えてくれた  
多様性と  
レジリエンス

12

新雅史さんの著書

『商店街はなぜ滅びるのか』(※1)は、商店街がシャッター街に変わる理由を教えてくれた。商店主は、行政の支援に頼り、自己変革を怠ったからだ。けれど、東日本大震災のとき、ボランティアがガレキ撤去に動いたのは、大規模なショッピングセンターではなく商店街だった。忘れられつつあった商店街から動き出した。「いつもを頑強する」より、レジリエンスを高める町のあり方や人の生き方が問われているのではない。

被災地に居場所がなかった

「早いものです。東日本大震災から五年が経ちます。いまま被災地にボランティアに行かれていますね。実は、東日本大震災のときは、ずっと東京にいたんです。行っても何かできるわけないし、足手まといになるだけのような気がして…。多くの東京の人たちもそう思っていたように思うんですが。」

「でも、結局行かれた。ええ、恩師である遠藤薫先生(※2)から、「こうした状況のなかで、なんら

社会に発信できないのは社会学者としていかなものか」と言われましてね。その後も、「あなたは若いころ、ピースボート(※3)をやっていたんだから、ボランティアのことを調べるべきだ」と背中を押されて。それで、ピースボートが支援していた宮城県の石巻に行きました。最初に行ったのは、二〇一一年の六月でした。

「その結果は、遠藤先生の編著『大震災後の社会学』(※4)という本にまとめられました。現地では、どういつことをされたんですか。」

石巻には週に二、三日しか滞在できなかったので、商店街のお店にたまったガレキを片付けたり、都市計画の方が

仕掛けたワークショップに参加したりしました。本当は、社会学の専門家としてお役に立ちたかったんですが、思いばかりで空回りしていました。結局社会学者は役に立つことはないなって、居場所がないように感じていました。居場所を求める方がそもそもおかしいんですけど…。

毎週深夜バスで石巻に出かけていたんですが、金銭的にも体力面でもキツかったですね。このまま続けられるのか、と思いついたころ、以前所属していた研究室の先生から、「こっちに来ないか、お前の役割があるよ」と誘われて、秋ぐらいから、岩手県の大槌町に行くようになりました。

「大槌では、何を。」

避難された方の仮設住宅の団地のコミュニティ組織づくりです。自治会に代わる組織をつくる支援です。社会学者としての専門知識をそれほど生かせるわけではないんですが、都市計画や看護学を専門とする方と協力しながら活動を進めてきました。いままも続いています。

「コミュニティ支援とは、どんなことですか。」

仮設団地は、津波の被害を受けておらず、住宅が建っていない場所に設けます。だから、居住地域に必要な街灯などが整備されていないので、暗くなる